



一、

「冬はいつもここにいる」とカラスは言った。雌なのだろう、女性のかんばせと身体を持ち、長い黒髪と冬のセーラー服を涼風になびかせる姿は確かに烏のそれであった。私は如何にも女性と言った見目からは想像出来ない低い声、男性ともとれる話し方に、最初は混乱したものの、やがて親しく話せる程度の間柄になった。その辺りの男子よりも背が高く、白い肌も凛々しい彼女は、北海道では珍しい小春日和の昼過ぎ、立ち入り禁止になっている学校屋上で初めて邂逅を遂げた時から私の憧れだった。

二、

「あなた、カラスという名前なのですか。名字などは」「ワタリガラスに名字は必要ないし、そもそも君に、カラスという名前が姓なのか名なのか分かるのか」私は慌ててかぶりを振った。言われてみればカラスはカラスでありまた渡りをする鳥であり、それ以上の存在ではないため、姓名は必要でないように感じたのである。「それでは、カラスさん」「さん、ね」「ええ、私、それなりに礼儀正しいのですよ」カラスは笑った。「こそばゆい。尊敬されるなど、まずない事だから」「そうですか。しかし、北欧神話では、オーディンの使いとして、フギンとムニンというワタリガラスがいます」「私は、北欧まで行かないよ。精々がカムチャツカまでだ」「成る程」

三、

私は彼女を、カラスと呼び捨てにする事とした。三度目にさん付けをした時、困ったような顔をされたからである。人を、否、誰かを困らせるのは好きではなく、まして気まずい顔などされたら、理不尽に怒りを感じてしまう。好きでない。怒るのも困らせるのも好きではない。殊に、憧憬を抱いている相手に対しては。友人と思いたい、カラスに対しては。勿論私の怒りや焦燥などカラスは気にも留めないかもしれないが、それはそれとして、ごく個人的ながら、こうありたいと望む自分は存在する。

四、

「カラス、あなたはとても大きい。女性として。シャープでもあります。私はちびで丸っこいから、とても羨ましいのです。渡りに出たら、私もあなたのようになれますか」カラスはそのような事を言うと可笑しげに答える。いつでも、彼女はそのような表情をしている。「順序が逆だよ。私は渡りをするために生まれて来たからこのような姿なのであって、渡るに連れて姿を変えて来た訳ではない」「では、私など、男子にからかわれるためにこのような格好に」「自分を卑下するものではないよ」「はい、カラス、あなたがそう言うなら」はは、とカラスは微笑み、聞いたことのないメロディを口ずさむ。

五、

それは明らかに人間の声ではないものの、札幌の繁華街や住宅地を明け方行き来するハシホソガラスよりも品が有り、どこか異国的な情緒を感じさせた。カムチャツカの民謡だろうか。今でも分からない。「フギンとムニンというのは偉いのか」「一応、神の使いだとか言われていますもの。神がいなくても、お話として偉い事になっているのです」「偉くて良い事などあるのか」「面倒事なら。生徒会長はいつも忙しないのです」「校長はどうだ」「教師が偉いとは思えないのです。色々と、若いなりに怒りを感じているもので」「成る程、君は大変だ」

六、

カラスの言葉はいつでも何処か他人事のように聞える。実際他人事であるし、種すら違うのだから当然と言えど、あまりの自然さに潔いと感じる時もしばしばである。私は教師に対して色々怒っているが、カラスは渡りを行い、餌を食べ、神の使いと崇められるだけだから仕方ないのかもしれない。否、だけ、という表現はカラスに失礼である。私は自分の浅はかさを反省する。彼女はいつだって尊敬の対象だし、悪し様に言いたくはない。それが微かな言葉のあやでも。

七、

「君は真面目過ぎるのだ」とカラスは言う。渡りは真面目ではないのだろうか。ともあれ、冬の間カムチャツカから降りてくるワタリガラスのカラスは、いつでも立ち入り禁止の屋上で私を待っていてくれたので、それだけでも満足だったし、真面目か否かは特段問題ではなかった。へちまぐれの私だけが知っている、世界最大の鳥。その化身。化身なのだろうか。「化身ではないよ」「では、例えばです。カラスはこの場で鳥の姿に変わるのですか」「それは出来るが、恥ずかしいからしない。同性とは言え、友人の前で裸になるような真似はご免なのだ」

八、

友人！ クラスに一人か二人しかそのように呼べる人間のいないミソッカスに、偉大な友人が！ 「どうしたのだね、涙など流して」「嬉しいのです。あなたが友人と呼んでくれたから」「私もね、君が相手をしてくれて嬉しい。だから友人と呼んでいる。お互い様だ」嗚呼、カラスはどこまでも優しいように思われた。明け方に品性の欠片もなく喚き散らすハシボソガラス達とは大違いである。彼女がもし、あの下品な、いや、同種を悪く言ってはいけない。私は、カラスの友人であるために烏を認めなければならない。その程度の挟持は持っている女子高生だと、一応自分だけでも信じたい。

九、

カラス、私のカラス。寒いのが辛ければ、家に迎えたい。しかし、渡りを止めた彼女は魅力をも失うだろう。そのように出来た身体なのであって、決して家でぬくぬくと過ごすための美麗さではない。「君は、私を止めないのか」「ええ、あなたは渡りをするのが生業ですもの」「生業ね」「そうです。生業なのです」「ならば、喜んで受け入れるよ」

十、

思慮の深い、カラス。フギンとムニンは思考と記憶を司る。ならば、この見目麗しくない女子生徒も、彼女の頭に、髪の毛に、セーラー服に、白い肌に残り続けるのだろうか。はてさて、まったくもって分からない。そうしている内に冬は明けようとしている。渡りに出るであろうカラスと、セーターを薄手の物に代える私。相変わらず後ろ暗さの欠片も見せずに鳴き続けるハシボソガラス達。三年生である私は推薦にて大学進学を決めており、来年屋上に来る事はない。

十一、

別れが近いのかもしれないとセンチメンタルに考え、すぐにそれを打ち消そうとする。また会える。また会える。彼女がワタリガラスの姿をとっていたとしても。「ねえ、カラス、私はいつでもこのニット帽を被ることにしますよ」「それはまた奇矯な事だ」「そうすれば、屋上からいなくなっても、私を見つけられるでしょう。ねえ、カラス、私は、あなたと友人でいたいのです」「会えなくても友人ではいられる」「いえ、会いたいです」「困った娘だ」嗚呼、困らせてしまった。馬鹿な娘。

十二、

「よろしい。私は君を見つけるよ。ニット帽を被っていなくともね。何しろフギンだかムニンなのだから」「はい、カラス、ありがとう」「そして、私はね、残念だが今から北へ行くのだ」何となく、そのような気はしていた。へちゃむくれのミソッカスでも、女には特殊な勘が備わっているのである。ワタリガラスはカムチャツカへ、その間に女子高生は女子大生になる。セーラー服を捨てて。

十三、

「最後に、気恥ずかしいが、私の姿を見せておこう。そうすればきっと、君もいずれ私を見つけるだろうから」「ええ、カラス。必ず、です」カラスは、そして、鳥の姿に変わった。光に包まれもせず、不定形になる事もなく、極めて無骨に変身を遂げた。セーラー服を脱いで飲み込み、白い肌を露出させ、腰まであるかという黒髪をさっと翻したら、もう一羽のワタリガラスになっていた。まさか服を飲み込むとは。消化不良を起こさないのだろうか。

十四、

「さて」「あら、口が聞けるのですね」「失礼だな。何にでもコツというものがあるのだ」「勿論です」「練習したのだよ」私は、初めてカラスを笑った。唯一の友人といつか言ってくれた彼女が、そのだけのために、鳥の姿で人間の声を発しようとしている様子が思い起こされ、何やら可笑しくなったのだ。「失礼な、失礼な」笑いが止まらない間、カラスの言葉もまたひたすら繰り返された。「失礼な、失礼な」

十五、

「しかし、君、私が白い姿だったのは幸いだらう。突然変異というのかな。白く生まれた私はワタリガラスにしては虚弱だが、その分友人の目にはつき易い」「私も、ちびで丸っこく育ったから、あなたの目に止まるでしょう」「勿論だ」「失礼な」「お互い様」「失礼な、失礼な」カラス。私の、カラス。いつかまた会えるだろうと言い残し、白い、世界で最も大きく偉いワタリガラスは飛び去って行った。次の冬に会いましょう。私の叫びは届いたろうか。何せ、彼女は飛ぶのが速い。風を切る音で聞えなかったかもしれない。嗚呼、恥ずかしい。屋上から叫ぶ、平凡な娘。

十六、

こうして高校三年生における私とカラスの話は終わる。冬の最中から終盤にかけてのお話である。その後何度となく彼女を見かけ、人の姿で出会う事もあったが、ワタリガラスは人間より寿命が短い。渡りを止めたのか、その間に死んだのか、それとも神の使いにでもなったのか知らない、とにかく数年後には白い姿を見る事もなくなり、私は代わりとしてムニンのストラップを買った。